

英語教育中核教員育成研修

令和7年度  
**授業改善  
プロジェクト  
報告書**



アクション・リサーチによる  
高等学校英語授業での実践研究

神奈川県立総合教育センター

## 目 次

「英語教育中核教員育成研修」とは	1
「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト	3
<b>「聞くこと」に関わる指導</b>	
音声変化の的確な処理と概要理解を促すリスニング指導	5
概要や要点を把握する力を身に付けさせるリスニング指導	9
<b>「読むこと」に関わる指導</b>	
アウトプット活動を目標にした読解力を高める指導	13
初見の英文を的確に読み進めるためのリーディング指導	17
深い読みを目指したリーディング指導	21
<b>「話すこと【やり取り】」に関わる指導</b>	
自信をもって考えや気持ちをやり取りする力を養う指導	25
即興的にやり取りする力を伸ばすスピーキング指導	29
<b>「書くこと」に関わる指導</b>	
論理的な文章を書く力を伸ばす指導	33

\*それぞれの実践レポートの内容については、言語活動の呼称などに関し、厳密な用語の統一はしていません。



#### 授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し、生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について、読者に参考となる情報を個人情報の保護に留意して記述する。
3. 実践報告については、理想論にとらわれず、現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者に分かるように記述する。
5. データ処理や分析については、統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れ、授業改善の手だての効果を記述する。

本研修の実施及び本報告書の作成にあたっては、過去の文献や研究成果、私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

## 「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト

### ○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

#### 1. 自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、活動のつながりを改めて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するという体験をします。

#### 2. 授業における課題の発見

現在担当している科目の一つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

(例) 英文読解に多くの時間を費やしてしまい、生徒に自己表現をあまりさせていない。

教科書英文の読解活動には取り組むが、初見の英文に対応できる読解力が育っていない。

#### 3. 改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを一つまたは二つ選びます。

#### 4. 生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

(質的データの例) 生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録

(数量的データの例) 標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

#### 5. 改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを、「リサーチ・クエスチョン」及び「改善の目安(数値目標)」として明確に言語化します。

#### 6. 目標達成のための手だての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

(例) プレリーディング活動を工夫すれば、興味や背景知識が活性化され、主体的に読解に取り組むようになるだろう。

#### 7. 生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

#### 8. 報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、報告書を作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します(研修最終日に英語による口頭発表も行います)。

## ○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさがありますが、生徒の質的・数量的ニーズを調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をとまなう）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が、仲間を増やしながら、より良い授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

## ○ 過去のテーマ分類

国際言語文化アカデミアにおける「英語教育アドヴァンスト研修」を含めた、過去の受講者が取り組んできた授業改善のテーマを分類すると、次の表のようになります。平成 26 年度までは、「動機付け・学習意欲」やスキルを支える言語知識である「語彙・文法」もテーマとして挙がっていますが、平成 27 年度からは、『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標に基づいたスキルの習得を目指す授業実践の必要性を重視し、4 技能のいずれかをテーマ（＝授業のゴール）として選択することとしています。

	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
聞くこと	0	1	0	0	1	1	2	2	2	0
話すこと	2	1	2	7	9	4	7	3	7	4
読むこと	5	4	4	6	11	8	6	6	4	4
書くこと	4	4	3	3	4	2	0	4	2	1
動機付け・学習意欲	6	3	1	5	—	—	—	—	—	—
語彙・文法	3	1	2	3	—	—	—	—	—	—
計	20	14	13	25	25	15	15	15	15	9

\*1：「技能統合型」

	R3	R4	R5	R6	R7
聞くこと	4	1	4	2	2
読むこと	5	3	2	4	3
話すこと【やり取り】	8	2	6	1	2
話すこと【発表】	4	1	3	3	0
書くこと	3	3	1	1	1
計	24	10	16	11	8

※R3年度より、話すこと【やり取り】【発表】の領域を設定し、掲載をLRSWの順としています。

## 音声変化の的確な処理と概要理解を促すリスニング指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス 79名の生徒である。ペアワークやグループワークを含む授業中の活動に熱心に取り組む生徒が多い。全体に向けた発問に対して、積極的に発言する生徒もいる。進路に関しては、ほぼ全員が国公立大学を始めとする難関大学への進学を希望している。

### 解決すべき課題

リスニングに対して、漠然とした苦手意識を持っている生徒が少なくない。スクリプトを読めば理解できる内容もリスニングになると聞き取れないと訴える生徒が多い。長めのモノログなどでは特に、個別の音や単語の聞き取りに気を取られ、全体の概要や主旨を理解できていない様子が見られる。英語の音声変化に対する指導を充実させ、生徒が自信を持って概要や要点を聞き取れるように指導したい。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

#### ・第1回アンケート調査（4月実施：回答者数68）

##### 1. 英語を聞く力に自信がありますか？

ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
2人(2.9%)	15人(22.1%)	35人(51.5%)	16人(23.5%)

##### 2. 英語を聞く力を伸ばしたいと思いますか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
64人(94.1%)	4人(5.9%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

#### <分析と考察>

英語を聞く力に関して、自信が「ある」または「どちらかといえばある」と答えた生徒の割合の合計は25.0%と少ない。「英語を聞くことについて、どのようなことが難しいと思うか」という自由記述の問いに対しては、「つながって発音されたり、弱く発音されるところが聞き取れない」「単語同士がつながって他の言葉に聞こえること」等、聞き取りの困難さの原因として、音声変化を挙げる回答が目立った。一方で、「英語を聞く力を伸ばしたいと思いますか」という問いに対する回答から、調査対象となった生徒の全員が聞く力を伸ばすことに対して意欲を持っていることが分かった。このことから、多くの生徒が聞く力を伸ばすことに関して強い課題意識を持っていること、それに対する指導を行うことの必要性が改めて示された。

・第1回リスニングテスト（5月実施：受験者数 69）

内容：共通テスト英語リスニング第5問、モノローグ（講義）、選択式 12 問各 1 点、12 点満点

結果：

平均点 (正答率)	標準偏差	12～9 点	8 点	7 点	6 点	5～0 点
6.38 点 (53.1%)	2.25	11 人 (15.9%)	9 人 (13.0%)	16 人 (23.2%)	7 人 (10.1%)	26 人 (37.7%)

<分析と考察>

平均正答率は約 53.1%であった。標準偏差が比較的大きいことから、生徒間に習熟度の差があることが明らかになった。また、設問別の正答率を見ると、文章の概要や要点を問う問題の正答率が比較的低かった。前述のアンケート結果で示されたような音声変化等による聞き取りの困難さがあるために、語彙レベルの意味理解に認知資源の多くを費やし、文章全体の主旨の理解まで及ばない状況であることが推察される。

リサーチ・クエスチョン

自信を持って長めのモノローグを聞き取り、話の概要や要点を的確に理解する力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・第2回リスニングテストで、12 点満点で 8 点以上の生徒が全体の 6 割以上になる。

・第2回アンケートで「英語を聞くことに自信がある」という生徒が全体の 6 割以上になる。

改善のための手立て

○ 音声変化について明示的指導を行い、自ら発音する練習に繰り返し取り組ませれば、音声変化を含む流暢な発話も正確に聞き取れるようになるだろう。

・リスニングタスクにおいて、内容理解を確認した後にディクテーションを行い、音声変化が生じていた箇所を明示するとともに、発音練習（リピーティング、オーバーラッピング、シャドーイング）を行う。

○ 内容を予測してから聞くというリスニングストラテジーの明示的指導とそれを活用する練習に繰り返し取り組ませれば、話の概要や主旨を理解できるようになるだろう。

・リスニングスクリプトの一部分（話の結論・まとめに関わる部分）について、音声を聞く前に、前の文脈から内容を予測させる活動を行う。

・共通テストの第5問と同様の、講義を聞いてメモを取るタスクで、音声を聞く前に空欄に入る内容を予測させる活動を行う。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

### ・第2回アンケート調査（12月実施：回答者数 68）

#### 1. 英語を聞く力に自信がありますか？

ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
4人(5.9%)	21人(30.9%)	22人(32.4%)	21人(30.9%)

#### 2. 4月からこれまでの学習を通じて、英語を聞く力が向上したと感じますか？

向上した	どちらかといえば向上した	変わらない	どちらかといえば低下した	低下した
11人(16.2%)	29人(42.6%)	21人(30.9%)	7人(10.3%)	0人(0.0%)

#### <分析と考察>

英語を聞く力に自信が「ある」、「どちらかといえばある」と答えた生徒の割合は合計で 36.8%となり、第1回より 11.8 ポイント増えたが、改善の目安となる 6 割には到達しなかった。また、自らの聞く力について 4 月より「向上した」、「どちらかといえば向上した」と感じた生徒の割合は合計で全体の 58.8%となった。回答の理由を自由記述させたところ、「発音がつながる語句表現を学んだおかげで、多少は理解することができた」「単語同士のつながりなどが少しずつ分かるようになった」といった、音声変化に関する理解が深まったことを聞く力が向上した理由として挙げる回答が見られた。また、聞く力が「変わらない」、「どちらかといえば低下した」と回答した生徒の一部は、その理由として、授業で扱う演習問題について「より音声が速くなり、構造が複雑になったから」等、教材の難易度を挙げていた。また、「自主的な勉強をあまりやっていないから」、「聞き取れていない部分も十分あるから」のような回答も見られた。以上のことから、聞く力の向上を実感しながらも、まだ「自信がある」と言えるレベルには達していないという自己評価をしている生徒が一定数いることが考えられる。また、授業で扱う演習問題の難易度が高すぎるために聞く力の向上を実感できていない生徒がいることや、聞く力の向上のための学習に十分に取り組めていない生徒がいることも課題として明らかになった。

### ・第2回リスニングテスト（12月実施：受験者数 69）内容は第1回と同じ

平均点 (正答率)	標準偏差	12～9点	8点	7点	6点	5～0点
7.28点 (60.7%)	1.73	20人 (29.0%)	13人 (18.8%)	14人 (20.3%)	9人 (13.0%)	13人 (18.8%)

#### <分析と考察>

全体の平均点は第1回から 0.9 点上昇し、約 60.7%の正答率であった。8 点以上正解した生徒は全体の 47.8%で、改善の目安となる 6 割には到達しなかったものの、第1回から 18.8 ポイント増加した。また、6 点以上正解した生徒は全体の 8 割以上となった。結果には統計的な有意差も認められた ( $p=0.01<0.05$ )。目標値に到達できなかった要因として考えられるのは、期間内に十分な指導回数を重ねられなかったことである。一方で、全体的な傾向としては、指導によって一定の効果が出始めていることを確認することができた。

## 教師の変化

生徒がリスニングにおいて抱えている課題を細分化して分析し、それに応じた授業づくりができるようになった。以前は、音声を聞いて内容理解を確認するための4択とTFの設問を作るだけの授業準備をしていた。本研究を通して、生徒はこちらの予想以上に音声のボトムアップ処理の部分に課題を抱えていると気づき、事前に授業で扱う音声教材を何度も繰り返し聞き、音声変化で課題になりそうな箇所をピックアップして授業内で明示的に説明するようになった。また、内容によって、その理解を確認するために最も適切な設問の形式を考えて教材を作成することができるようになった。

## 今後の課題（次の改善点など）

今回の研究においては、授業内で主に「音声変化」及び「内容を予測しながら聞くストラテジー」に着目して授業づくりを行ったが、これらが全ての生徒のリスニングにおける課題の解決に役立つとは限らない。生徒によって、単語学習における音声面の知識の定着が不十分であることや、意味をすぐに想起できないことが原因である場合もある。今後は授業内で生徒が自分自身のリスニングにおけるつまづきに気づけるような発問・活動を行い、解決のための手立てとなりうる学習方法を提示し、生徒自身がその中から選び取って自主的に学習に取り組むよう仕向けるような授業づくりを考えていきたい。

## まとめ・感想

アクション・リサーチという手法を経験し、今後の自分自身の授業改善の手立てを見出すことができた。これまで授業改善というと、新たな授業手法を取り入れることを第一に考えていたため、本研究においても、当初はリスニング指導に関する書籍の中でも様々な指導法に関する部分にばかり目を通していった。しかし、研究を進める中で、新しい手法の導入を考えるより前に、自分自身が指導する生徒の実態や課題を十分に分析し、必要な手立てを丁寧に検討していく過程が何より重要であると感じた。さらに、手立てを実施した上で、生徒の取組を絶えず評価し、指導を改善していくことも必要である。今後も、目の前の生徒が抱えている課題や伸ばしたい力を出発点とした授業改善を、日々続けていきたい。

## 授業改善にあたって参考にした資料等

鈴木寿一・門田修平(編). (2018). 『英語リスニング指導ハンドブック』大修館書店.

望月昭彦(編). (2018). 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法 第3版』大修館書店.

## 概要や要点を把握する力を身に付けさせるリスニング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス 80名（男子 34名、女子 46名）の生徒である。ほとんどの生徒が4年制大学への進学を希望し、積極的に授業に参加している。

### 解決すべき課題

意欲的に授業に参加する生徒が多い一方、リスニングについて苦手意識を持つ生徒が多いようである。生徒の授業中の様子や発言、定期テストの結果などから、リスニングスクリプトの内容を読めば理解できるのにリスニングになると聞き取ることができない、という課題がありそうである。リスニングの学習方法を確立させ、生徒が自信を持って概要や要点を把握できるように指導したい。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

#### ・第1回英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数 79）

1. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。（複数回答可）

聞く力	読む力	話す力	書く力	単語や熟語	文法
58人(73.4%)	49人(62.0%)	59人(74.7%)	36人(45.6%)	37人(46.8%)	37人(46.8%)

2. 英語を聞く力に自信がありますか。

自信がある	どちらかという自信がある	どちらかという自信がない	自信がない
1人(1.3%)	21人(26.6%)	40人(50.6%)	17人(21.5%)

#### <分析と考察>

アンケートの結果から、「読む力」と「書く力」に比べ、「聞く力」と「話す力」を伸ばしたいと考えている生徒の割合が高いことが分かった。また、英語を聞くことに「自信がある」「どちらかという自信がある」と回答した生徒が合わせて 27.9%にとどまっており、生徒が英語を「聞く力」高め、「聞く力」に対して自信を持てるように指導していく必要があることが分かった。

・第1回リスニングテスト（9月実施：受験者数 76）

内容：英検準2級リスニングテスト第3部（内容一致、選択問題 10 問、10 点満点）

長めの会話や説明を聞き、その内容に関する質問に答える問題形式である。会話や説明は1度のみ再生される。

平均点	標準偏差	最高点	最低点	得点率7割以上の生徒数	得点率6割の生徒数	得点率5割以下の生徒数
5.0	2.08	10	1	14人(18.4%)	15人(19.7%)	47人(61.8%)

<分析と考察>

高校中級程度が目安とされる英検準2級のリスニング問題で、10点満点で平均点が5.0点のテストにおいて標準偏差が2.08であった。得点率7割以上の生徒の割合が18.4%であったのに対し、得点率5割以下の生徒の割合は61.8%と半数以上を占めた。「聞く力」を向上させるための、基礎的・基本的な指導が必要である。

リサーチ・クエスチョン

日常的な話題について、概要や要点を把握する力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・第2回リスニングテストで得点率7割以上の生徒の割合が70%以上になる。

・第2回英語学習に関するアンケートで英語を聞く力に「自信がある」「どちらかという自信がある」と回答する生徒の割合が70%以上になる。

改善のための手立て

- 明示的な音声指導を行い、英語の音変化を意識した音読練習に取り組みせれば、英語特有の音変化に慣れ、聞き取りやすくなるだろう。
  - ・既習の英文を使って音変化（つながる・消える・変わる）について指導し、練習させる。
  - ・授業中に扱う英文から1文を取り出して音変化について指導し、音変化を意識した音読練習をさせる。
  - ・帯活動でオーバーラッピングとシャドーイングの練習をさせ、英語の音声処理能力を向上させる。
  
- リスニング力の定点観測を行うことで、教師だけでなく生徒も自身のリスニング力の変化を理解しやすくなるだろう。
  - ・同じ難易度のリスニングテストを年間で複数回実施する。
  
- リスニングの家庭学習を促進させるための指導や活動を行えば、リスニング力が高まるだろう。
  - ・家庭におけるシャドーイングやオーバーラッピングの練習の仕方を指導する。
  - ・パフォーマンステストとして、自分で選択したパートをシャドーイングする活動を設定する。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回英語学習に関するアンケート（11月実施：回答者数 80）

1. 英語を聞く力に自信がありますか。

自信がある	どちらかという自信がある	どちらかという自信がない	自信がない
3人(3.8%)	20人(25.0%)	24人(30.0%)	33人(41.3%)

2. 4月と比べてリスニング力が向上したと思いますか。

非常にそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう思わない
12人(15.0%)	58人(72.5%)	10人(12.5%)	0人(0.0%)

3. 家庭でオーバーラッピングをどの程度練習していますか。

週5回以上	週3～4回	週1～2回	全く練習していない
1人(1.3%)	3人(3.8%)	23人(28.8%)	53人(66.3%)

4. 家庭でシャドーイングをどの程度練習していますか。

週5回以上	週3～4回	週1～2回	全く練習していない
3人(3.8%)	2人(2.5%)	19人(23.8%)	56人(70.0%)

### <分析と考察>

英語を聞くことに「自信がある」、「どちらかという自信がある」と回答した生徒の割合が、27.8%から28.8%となり、「自信がない」と回答した生徒の割合が21.5%から41.3%に増加した。改善の目安を達成することはできなかった。一方、4月と比べてリスニング力が向上したと思うかというアンケートに対し「非常にそう思う」、「そう思う」と回答した生徒の割合が87.5%であった。自身のリスニング力が向上していると感じている生徒が多いにも関わらず、自信を失った生徒の割合が増加したのは、授業内の活動を通して自身がリスニングにおいてできることとできないことの区別が明確になったためではないかと思われる。また、家庭で週1回以上オーバーラッピングの練習をしている生徒の割合が33.8%、シャドーイングにおいては30.0%となった。継続的に家庭学習を行わせる手立てが必要である。

・第2回リスニングテスト（11月実施：受験者数 80）

内容は第1回と同じ

平均点	標準偏差	最高点	最低点	得点率7割以上の生徒数	得点率6割の生徒数	得点率5割以下の生徒数
6.9	1.65	10	3	47人(58.8%)	17人(21.2%)	16人(20.0%)

### <分析と考察>

得点率7割以上の生徒が70%以上になるという改善の目安の目標値には届かなかったが、第1回の18.4%から58.8%まで上昇した。事前・事後のデータが揃っている76名の得点についてt検定を行っ

たところ、統計的に有意な伸びが認められた ( $p<0.001$ )。また、得点率5割以下の生徒数の割合が61.8%から20.0%に減少し、標準偏差も2.08から1.65に減少した。改善のための手立てが、全体として「聞く力」の向上に対して一定の効果があったと言えるだろう。

## 教師の変化

リスニング力の定点観測を行う重要性を認識した。同じ難易度のリスニング問題を年間で複数回実施することで、教師だけでなく生徒もリスニング力の推移が明確に分かり、音変化指導、オーバーラッピング、シャドーイングの意義を認識しやすくなった。その際、平均点だけではなく、標準偏差や家庭学習の取組と得点の相関なども生徒に提示した。今年度は、英検準2級リスニング問題を使用した。次年度は英検2級リスニング問題を使用し、引き続き定点観測を行いたい。また、パフォーマンステストへの認識も変化した。今回、一人1分程度でシャドーイングのパフォーマンステストを実施し採点を行った。これまで授業時間が圧迫されるため敬遠しがちであったが、生徒の取組は良好で、家庭で十分に練習を行ったことがうかがえ、次年度以降も様々なパフォーマンステストに取り組みたいと考えている。

## 今後の課題（次の改善点など）

家庭学習の不足が課題として挙げられる。帯活動としてオーバーラッピングやシャドーイングの練習を行ったが、授業内だけで十分な練習量を確保することは困難である。そのため、生徒には家庭学習でそれらの練習を行うよう促した。しかし、家庭でオーバーラッピングを全く練習していない生徒の割合は66.3%、シャドーイングにおいては70.0%となった。来年度は、継続して家庭学習を行わせるための手立てを検討したい。

## まとめ・感想

本研修を通して、リスニング指導に関する成果と課題が明確になった。授業内外の取組に対する教師の満足度は生徒のそれに比例しているようにも感じた。今年度の取組を次年度以降につなげていきたい。

## 授業改善にあたって参考にした資料等

鈴木寿一・門田修平(編). (2018). 『英語リスニング指導ハンドブック』大修館書店.

## アウトプット活動を目標にした読解力を高める指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス114名（男子56名、女子58名）の生徒である。英語に対する苦手意識から、発言は多くはないが、全体として授業への取組状況は良好である。例年、4年制大学進学を目指す生徒が最も多い。

### 解決すべき課題

生徒の読解力（教科書で読んだ内容をどのように、またどれほど理解しているのか）を考えたとき、各英文を日本語訳して理解できた、という段階で終わってしまう印象があり、それについて課題を感じていた。日本語訳に頼り過ぎずに、題材の概要や要点を捉えられるよう、題材の内容を読み取って深く理解するための生徒の英語を読む姿勢を育て、そのための指導法を研究する必要があると考えた。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回生徒の英語学習の状況を知るためのアンケート（4月実施：回答者数111）

1. 高校に入学してからの英語の授業でどのような知識や力が伸びたと思うか（複数回答可）

聞く力	読む力	話す力	書く力
31人(27.9%)	53人(47.7%)	18人(16.2%)	28人(25.2%)

2. 今後の授業でどのような力を伸ばしたいか（複数回答可）

聞く力	読む力	話す力	書く力
64人(57.7%)	33人(29.7%)	72人(64.9%)	42人(37.8%)

#### <分析と考察>

アンケートでは、生徒にとってこれまで1番伸ばすことができず、今後伸ばしたい力が話す力であることが分かった。対照的に、読む力については伸びたと考えている生徒が最も多かった。しかし、前述のとおり、題材の概要や要点を捉えられるような読解力についてはまだ課題が残っている。これらのことから、生徒の読む力、話す力の両方を統合的に伸ばすことができないか考えた。どのようなことについて話したいかの質問に対して「聞いたり読んだりしたことに対する簡単な意見・感想」が全体の41%だったことも踏まえ、読んだ題材の説明と、題材に関連した日常生活に関わる問いについて話す活動を取り入れることが読解力の向上に有効であると考えた。

・第1回テスト（6月実施：受験者数 114）

内容：授業で読んだ教科書の題材についての説明と、題材に関連した問いについて話すという内容のテストを行った。生徒はプレリーディング活動としてリスニングでの内容理解を行い、内容に関する読解問題を解いた後、黙読や音読を行ってから、テストに臨んだ。テストを行うレッスンのパート、関連した問いは事前に提示し、テストは話す前の準備の時間を設けて、決められた時間録音したものを提出させた。

関連した問い：Are you a punctual person? Why do you think being punctual is important?

評価ルーブリック：

	内容の説明	関連した問い
A	要点を理解し、聞き手に内容が伝わるように具体的に話せている。	質問に明確に答え、理由や意見を2つ以上言えている。
B	要点を理解しているのは分かるが、具体的に話せていない。	質問に明確に答えているが、理由や意見が少ない。
C	要点の理解が足りず、伝わりにくい。	質問に明確に答えられていない。

結果：

内容の説明			関連した問い		
A	B	C	A	B	C
21人(18.4%)	60人(52.6%)	34人(29.8%)	21人(18.4%)	59人(51.8%)	35人(30.7%)

<分析と考察>

「内容の説明」でB評価以上の生徒が71.1%と予想より多く、文法ミスはあるものの、生徒が題材の要点をある程度理解できていることが分かった。しかしながら、うち、B評価の生徒が52.6%で、要点について、覚えていることを伝えようとしているが、具体的に話せていなかった。C評価の3割の生徒は、ほとんど何も話せていなかった。「関連した問い」についてもB評価以上は70.2%だった。読んだ内容についてのアウトプットの質と量をより高めるために、より深く読んで理解する力を伸ばす手立てを行う必要があると考えた。

リサーチ・クエスチョン

読んだ内容を口頭で説明したり、内容に関する問いに対して自分の考えを表現したりするために必要な読解力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・英語を読む力が伸びたと思う生徒が全体の7割を超える。

・英語を読むことに対する自分の姿勢が変わったと思う生徒が全体の7割を超える。

・第2回テストの「内容の説明」、「関連した問い」両方において、B評価以上の生徒が全体の8割を超える。

改善のための手立て

○ 教科書の題材の概要や要点について理解を深められるような内容理解問題を取り組ませれば、内容

理解の質が上がり、生徒が内容をよく理解した上で、英語でアウトプットできるようになるだろう。

- ・プレリーディングとしてリスニングを行い、概要と要点を問う内容理解問題を毎パート解く。
- ・さらに詳細な要点を捉えるための英問英答の内容理解問題を毎パート解き、理解を深める。
- ・英文の内容理解をさらに深め、さらに話す活動につなげるため、音読活動を行う。その際、自信を持って発音できるよう、発音の難しい単語やフレーズに注意を促す。

○ ポストリーディング活動として、リテリングの活動と指導をすれば、生徒がより積極的に、英文の理解を深められるようになるだろう。

- ・話す前に、生徒が自分自身の理解度を確認するために、日本語で英文の内容を要約する。まず英文を再読し、キーワードやキーセンテンスを探させる。
- ・英問英答を通じてペアで題材の要点を確認させる。
- ・英文を見ずに、自分の力で英文の説明を行わせる。
- ・言えたところと言えなかったところ、課題は何かを書いて、今後の学習のために何をすればよいか記録させる。

○ 教科書の題材を読んだ後に、その題材に関わる質問について、理由に加え、自身の経験との関連、題材から学んだこと等を踏まえて、自分の考えを深める活動を繰り返せば、生徒の読む姿勢が変わるだろう。

- ・問いに対する答えだけでなく、必ずその理由や自身の経験との関連、題材から学んだことを踏まえて考えるよう指示をする。
- ・題材に関わる質問に自力で答えることが難しい生徒には、フレームを提示し、そのフレームを使って答えられるよう手助けをする。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回生徒の英語学習の状況を知るためのアンケート（12月実施：回答者数 103）

1. 「英語コミュニケーションⅡ」の授業でどのような力が伸びたと思うか（複数回答可）

聞く力	読む力	話す力	書く力
39人(37.9%)	67人(65.0%)	26人(25.2%)	27人(26.2%)

2. 英語を読むということに対する自分の姿勢が変わったと思うか

とても変わった	変わった	変わらなかった	全く変わらなかった
11人(10.7%)	80人(77.7%)	9人(8.7%)	1人(1.0%)

・第2回テスト（12月実施：受験者数 112）

結果：第1回との比較

	内容の説明			関連した問い		
	A	B	C	A	B	C
6月	21人 (18.4%)	60人 (52.6%)	34人 (29.8%)	21人 (18.4%)	59人 (51.8%)	35人 (30.7%)
12月	18人 (16.1%)	70人 (62.5%)	24人 (21.4%)	60人 (53.6%)	45人 (40.2%)	7人 (6.3%)

### <分析と考察>

アンケートで、読む力が伸びたと答えた生徒は 47.7%から 65.0%に増えたが、改善の目安の 7 割には届かなかった。しかし、読むことに対する自分の姿勢について、変わったと答えた生徒は全体の約 88.3%で、改善の目安の 7 割を達成した。生徒の書いた振り返りを参照すると、手立てのリテリングや、読んだ内容について自分の意見を考える活動について、「ただ読むのではなく、より深く内容を考えながら読むようになった」、「自分の意見を考えることで、内容を深く理解できるようになった」等の読解に対する前向きな取組が確認できた。

第 2 回テストの結果において「内容の説明」の B 評価以上の生徒が全体の 8 割を超えるという改善の目安を達成することはできなかったが、「関連する問い」の A 評価が 18.4%から 53.6%に大幅に増加した。授業中、多くの生徒が読んだ題材と自分の経験を関連させて質問に答えようとする姿勢が見られるようになったので、手立てに一定の効果があったと考えられるが、第 1 回と第 2 回で読んだ題材が異なるため、今後も検証していく必要はあるだろう。

### 教師の変化

教科書付属の内容理解問題だけでなく、生徒がより題材を読み込む必要があるよう、また、深い理解を導くような問いを考えて取り組ませた。アウトプット活動（具体的にはリテリング）の指導について本で学び、その中でも指導する生徒に合う手立ては何かを研究した。また、生徒の取組状況の観察から分かったこと、振り返りの分析を通して改善点を探し、それを基に授業デザインを変えた。

### 今後の課題（次の改善点など）

二つ目の手立ての、リテリングをする準備で日本語での要約を介する手順は、生徒の振り返りから、効果的な支援となっていたことが分かったが、短くても英語で要約できるよう指導を模索していきたい。また、英語が苦手な生徒が少しでも英語を発することへの抵抗感を軽減できるような指導が必要であると考ええる。

### まとめ・感想

読解後に、リテリングと自分の意見を考えて伝える、という生徒にとって負荷の大きい活動を設定し、最初のうちは手立てが十分ではなく失敗の連続だった。しかし、生徒の振り返りを分析し続けたことが、私自身の授業に大きな変化をもたらした 1 番の理由だと考える。初めのうちは、アクション・リサーチが私自身の挑戦であるという気持ちが大きかったが、生徒にとっても負荷の大きい活動への挑戦であり、この 1 年で生徒がどれだけ努力して成長できる可能性があるかを知ることができた。今後も生徒の課題を授業の改善点と捉え、生徒の英語を深く読む力を育てていきたい。

### 授業改善にあたって参考にした資料等

佐々木啓成. (2020). 『リテリングを活用した英語指導 理解した内容を自分の言葉で発信する』大修館書店.

萩野俊哉. (2021). 『言語活動がアクティブ・ラーナーを育てる 生徒の英語であふれる授業』大修館書店.

## 初見の英文を的確に読み進めるためのリーディング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は6クラス 244名（男子 127名、女子 117名）の生徒である。例年、約 60%の生徒が大学に進学、約 10%が短期大学に進学し、約 20%が専門学校に進学する。生徒は、授業中の様々な活動に前向きに取り組むことができる。一方で、中学校の既習事項の理解については生徒によるばらつきが大きいいため、学び直しを含む段階的な指導が必要である。

### 解決すべき課題

時間をかけて1文1文の意味を取ることではできるが、限られた時間でまとまりのある文章の概要や要点を捉えるような俯瞰した読みは苦手とする様子が見られる。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数 244）

#### 1. 英語は楽しいと思いますか？

楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえば楽しくない	楽しくない
79人(32.4%)	110人(45.1%)	51人(20.9%)	4人(1.6%)

#### 2. 英語を読む力に自信がありますか？

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
14人(5.7%)	68人(27.9%)	112人(45.9%)	50人(20.5%)

#### 3. 読解力を高めるために改善したい力は何ですか？（複数回答可）（回答数の多い四つを抜粋）

未知語を推測する力	文章の要点をつかむ力	文章の論理構造を理解する力	文の意味のまとまりごとで理解する力
169人(69.3%)	126人(51.6%)	94人(38.5%)	86人(35.2%)

### <分析と考察>

英語の学習について 77.5%の生徒が「(どちらかといえば) 楽しい」と回答する一方で、英語を読む力に「(どちらかといえば) 自信がある」と回答した生徒は 33.6%にとどまり、読むことへの自信を高める手立てが必要であることが分かった。また、「未知語を推測する力」、「文章の要点をつかむ力」について、それぞれ 69.3%と 51.6%の生徒が改善したいと回答したことから、当初の見立てと同様の結果が示された。特に、解決すべき課題でも触れたとおり、「文章の要点をつかむ力」に課題を感じている生徒が多いので、積極的に指導を実践したい。

・第1回リーディングテスト（5月実施：受験者数243）

内容：2023年度第1回英検準2級、大問4A、1問1点計7点：概要や要点を問う設問（15分）

平均点	標準偏差	0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点
4.1点 (59.3%)	1.99	12人 (4.9%)	17人 (7.0%)	26人 (10.7%)	30人 (12.3%)	44人 (18.1%)	38人 (15.6%)	45人 (18.5%)	31人 (12.8%)

<分析と考察>

平均点は4.1点で、約46.9%の生徒が5点以上（得点率約70%）となった。一方、標準偏差は1.99で、2割強の生徒が2点以下で、生徒間で概要や要点を捉える力に差があることが分かった。

・第1回リーディングテストについてのアンケート（6月実施：回答者数244）

この問題を解くにあたり、課題となった点は何ですか？（複数回答可）（回答数の多い四つを抜粋）

知らない単語が多くあった	英文を読むのに時間がかかった	英文の内容が難しかった	分からない文法が多くあった
161人(66.0%)	149人(61.1%)	79人(32.4%)	70人(28.7%)

<分析と考察>

66.0%の生徒が「知らない単語が多くあった」と回答しており、普段活用している単語学習サービスの活用推進とともに、未知語を含む文章の読解方略指導が必要である。また、61.1%の生徒が「英文を読むのに時間がかかった」と回答している点については、速く読むための指導とあわせて、速く読もうとする意識づけの側面からも指導が必要であることが分かった。

リサーチ・クエスチョン

自信を持って初見の英文をスムーズに読み進め、文章の概要や要点を的確に読解する力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・第2回リーディングテストで、7点満点で5点以上（得点率約70%）の生徒が全体の70%以上になる。
  - ・第2回アンケートで、「英文を読むことに（どちらかといえば）自信がある」と答える生徒が全体の70%以上になる。

改善のための手立て

- 概要や要点の理解に焦点を当てた方略指導をすれば、自分の力で文章の概要や要点を理解することができるようになるだろう。
  - ・英文全体の論理構造を理解させるため、ディスコースマーカーについての指導をする。
  - ・各段落の重要文と考えるところに下線を引かせたり、文章全体を1文で要約させたりすることで、概要や要点を理解する力を育成する。
  - ・未知語を推測するための方法や、派生形態素についての明示的な指導をする。
  - ・新出単語のうち、文脈から推測できそうな語についてはあえて意味を指導せずに初読させる。

- 読解速度を向上させる指導をすれば、英文をスムーズに読み進めるようになるだろう。
  - ・英文をチャンクごとに区切り、音読させることで、読み返しをしないで読解する力を伸ばす。
  - ・教科書本文の目標WPMを設定し、毎授業自身のWPMを記録させることで、素早く読むことを習慣化させるとともに、自身の読む速さについての変化を視覚化する。
- 初見の英文読解に積極的に取り組ませて、成功体験を積み重ねれば、自信を持って英文読解に取り組むようになるだろう。
  - ・WPMを記録することで、自身の読む速さの成長度を自覚できるようにする。
  - ・様々なテキストジャンルに慣れさせるために、教科書以外にも英検の出題英文等に取り組ませる。
  - ・定期試験に初見問題を出題し、初見英文を自力で読解できる力の必要性を意識させる。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回リーディングテスト（12月実施：受験者数243）＊内容は第1回と同じ

平均点	標準偏差	0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点
4.7点 (67.5%)	1.67	2人 (0.8%)	9人 (3.7%)	16人 (6.6%)	28人 (11.5%)	39人 (16.0%)	65人 (26.7%)	43人 (17.7%)	41人 (16.9%)

#### <分析と考察>

第2回リーディングテストでは、第1回に比べ平均点が0.6点上昇した。改善の目安とした70%以上には届かなかったが、5点以上（得点率約70%以上）の生徒は14.4ポイント増の61.3%となった。標準偏差は0.32ポイント減の1.67となった。このことは、得点のばらつきが小さくなり下位層が平均に近づいたことを示している。また、第1回、第2回の得点について、対応のあるt検定を行ったところ、有意差が確認された（ $p<.001$ ）。

- ・第2回アンケート（12月実施：回答者数242）

#### 1. 英語は楽しいと思いますか？

楽しい	どちらかといえば楽しい	どちらかといえば楽しくない	楽しくない
74人(30.6%)	129人(53.3%)	37人(15.3%)	2人(0.8%)

#### 2. 英語を読むことに自信がありますか？

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
16人(6.6%)	56人(23.1%)	101人(41.7%)	69人(28.5%)

#### 3. 第1回テストと比べ、英語を読む力は伸びたと思いますか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
51人(21.1%)	140人(57.9%)	38人(15.7%)	13人(5.4%)

4. この問題を解くにあたり、課題となった点は何ですか？（複数回答可）（回答数の多い四つを抜粋）

知らない単語が多くあった	英文を読むのに時間がかかった	英文の内容が難しかった	分からない文法が多くあった
187人(77.3%)	108人(44.6%)	92人(38.0%)	78人(32.2%)

### <分析と考察>

「英語を読む力に（どちらかといえば）自信がある」と答えた生徒は、3.8ポイント減の29.8%となり、改善の目安とした70%には到達しなかった。「英語は（どちらかといえば）楽しい」と回答した生徒は6.4ポイント増の83.9%となった。また、第1回テストと比べ、英語を読む力が伸びたと感じるかについて、「（どちらかといえば）そう思う」と回答した生徒は78.9%であった。英語学習に対しては前向きに取り組み、読む力が向上したと認識しつつも自信が低下した原因として、以前よりも適切に自己認識ができるようになった可能性が考えられる。「自分は何に課題があるのか」や「何ができるようになりたいのか」といったことについて、より分析的な視点を持てることは、さらなる成長のために大きな意味を持つだろう。生徒が読むことに関して自信を持てるよう、生徒ができたことについて意識的に価値付けをしていくなど、今後の一層丁寧な指導の必要性を強く感じた。

### 教師の変化

アクション・リサーチを通して、目の前の生徒の得意不得意を分析して指導法を調整することの重要性を強く感じた。英語学習におけるゴールを何に定めるかは学習者により千差万別で、行うべき指導もそれぞれに異なる。また、目標到達の過程で、その時点の生徒を正しく診断し、都度個別最適な指導法を選択する判断力と素養を高めることこそ、授業者として求められることだと感じた。

### 今後の課題（次の改善点など）

今回の結果から、生徒の読む力に対する自信を高めることが最大の課題であると考えた。例えば、多読用教材を活用して、個々のレベルに合った教材の読解を授業内で継続的に行うことが考えられる。その際、比較的低い難易度から段階的に課題を提供して成功体験を積みせたり、読解できたことについての教員からのフィードバックを増やし価値づけたりしていくことが、生徒の自信を高める上で有効となるだろう。

### まとめ・感想

今回のアクション・リサーチを通して、指導法や教育理論を幅広く学び、生徒の抱く課題と発達段階に応じた調整を加えて授業実践を行った。その際、担当指導員から客観的かつ専門的な視点に基づく助言をいただきながら研究を進められたことは、大きな財産となった。今後は、私が本研修で培った知識や経験を勤務校の教育に還元して、確かな指導力で周囲を支えていけるような教員を目指していきたい。

### 授業改善にあたって参考にした資料等

卯城祐司(編). (2009). 『英語リーディングの科学－「読めたつもり」の謎を解く』 研究社.  
Yosuke Sasao. & Stuart Webb. (2018). *The guessing from context test*. Kyoto University, Japan. The University of Western Ontario, Canada.

## 深い読みを目指したリーディング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR・ <span style="border: 1px solid black;">習熟度</span> ・小集団
-----	---------------	----	---	----	--

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス 50名（男子 15名、女子 35名）の生徒である。普通科の他に専門学科が設置されている。ほとんどの生徒が授業に積極的に参加しているが、英語の習熟度には差が見られる。例年、全体の9割近い生徒が4年制大学へ進学しており、そのうち約6割の生徒が一般選抜を利用している。

### 解決すべき課題

授業中、教科書の文章を読むとき、多くの生徒は個々の単語の意味は理解できているものの、それらを意味のまとまりとして捉えることができず、的確に文章の概要や要点を捉えることに困難を感じているように思われる。また、教科書以外の文章の読解に初見で取り組む際、生徒は未知語が原因で読み進めることが難しくなってしまうことが多いように感じている。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回英語学習に関するアンケート（5月：回答者数 50）

1. 英語を読む力に自信がありますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
2人(4.0%)	18人(36.0%)	19人(38.0%)	11人(22.0%)

2. 英語を読む力を伸ばしたいですか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
35人(70.0%)	15人(30.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

3. 初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解することができますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
2人(4.0%)	23人(46.0%)	21人(42.0%)	4人(8.0%)

### <分析と考察>

自身の英語の読解力に自信を持つ生徒は4割にとどまった一方で、全生徒が読解力向上を望んでおり、リーディング指導に焦点を当てる必要性が確認できた。また、初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解することが（かなり・まあまあ）できていると回答した生徒の割合は50.0%であった。読解の目的に応じた方略に関する指導や練習を取り入れていくことが求められる。

・第1回リーディングテスト（5月実施：受験者数 50）

内容：英検準2級の長文問題の既存の要点問題4問と自作の概要問題1問の計5問、1問2点として10点満点で採点した。

平均点	標準偏差	最高点	最低点	得点率8割以上の生徒	得点率4割以下の生徒
7.24点	2.40	10点	2点	29人(58.0%)	11人(22.0%)

<分析と考察>

得点率8割以上の生徒が全体の58.0%で、このグループは基本的な英文構造や概要は自力で把握できていることが分かった。得点率4割以下の生徒が22.0%で、意味のまとまりを意識して読めていない可能性があり、日頃の課題が表れた。授業中、未知語に遭遇すると文脈から推測する前に諦めて思考を止めてしまう様子が観察されるため、英文の構造や概要を自力で把握させるための具体的な手立てが必要であることを認識した。

リサーチ・クエスチョン

生徒が説明文や意見文の概要、要点、展開などを的確に捉えて、自力で英文を読む力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・第2回リーディングテストの得点率8割以上の生徒が全体の7割以上になる。

・第2回アンケートで「初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解する」ことが「(かなり・まあまあ)できている」と答える生徒が全体の6割以上になる。

改善のための手立て

- リーディングストラテジーの指導をすれば、自力で概要や要点を的確に理解できるようになるだろう。
  - ・スラッシュリーディングをさせ、意味のまとまりを意識して読めるように指導する。
  - ・接頭辞や接尾辞、または前後の文脈などから未知語の推測をするように指導する。
  - ・ディスコースマーカーに着目する読み方を指導する。
- 読解タスクの工夫をすれば、意欲を持って英文読解に取り組めるようになるだろう。
  - ・プレリーディング活動を充実させて生徒が本文の内容に興味を持つように工夫する。
  - ・プレリーディング活動としてキーワードに関するリスニング活動を行い本文の内容理解を促す。
  - ・ワークシートに文章の概要を問う設問などを設けて、求められる読解スキルを明確にする。
  - ・ポストリーディング活動としてリテリング活動と指示質問 (referential question) に取り組ませ、内容理解を深めるよう工夫する。
- 教科書の英文の他に別の英文を読む機会を定期的に与えれば、初見の英文を自分の力で読み進めることができるようになるだろう。
  - ・定期的に200語程度の英文を読む機会を与えて未知語を推測しながら読むことに慣れさせる。
  - ・時間を計測して読むことで読む速さと共に集中して読むことを意識させる。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回リーディングテスト（12月実施：受験者数50）※内容は第1回と同様

平均点	標準偏差	最高点	最低点	得点率8割以上の生徒	得点率4割以下の生徒
6.68点	2.35	10点	0点	30人(60.0%)	13人(26.0%)

### <分析と考察>

平均点は第1回テストの7.24点から第2回テストの6.68点へと下がった。得点率8割以上の生徒は29名(58.0%)から30名(60.0%)へと増加したが、得点率8割以上の生徒が全体の7割以上になるという目標には届かなかった。第2回テストでの平均点低下の要因を分析するために、両テストの英文のリーダビリティを測ったところほぼ同じであったが、設問については、私や同僚教員の共通認識としても、事後テストは事前テストに比べて解答を導きにくいと感じられ、同じ級の英検の長文問題でも、設問によって取り組みやすさに違いがあると分かった。高得点層の割合が微増したのは、今回のリーディング指導がしっかりと効果を発揮したからだと捉えている。目標の数値には届かなかったものの、生徒が自力で的確に英文を読み解く力は着実に育っており、一定の成果はあったと言えるだろう。

- ・第2回英語学習に関するアンケート（12月実施：回答者数50）

#### 1. 英語を読む力に自信がありますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
4人(8.0%)	20人(40.0%)	18人(36.0%)	8人(16.0%)

#### 2. 初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解することができますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
4人(8.0%)	27人(54.0%)	16人(32.0%)	3人(6.0%)

#### 3. スラッシュリーディングは英語を読むのに役に立つと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
21人(42.0%)	23人(46.0%)	5人(10.0%)	1人(2.0%)

#### 4. 高校生になってから今までに英語を読むスピードが速くなったと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
15人(30.0%)	25人(50.0%)	6人(12.0%)	3人(6.0%)

#### 5. 教科書以外の英文を読むことにもチャレンジしたいと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
17人(34.0%)	24人(48.0%)	5人(10.0%)	3人(6.0%)

### <分析と考察>

「初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解する」ことができているへの肯定的回答が、5月の50.0%から12月には62.0%へと向上し、改善の目安であった6割以上となった。また、88.0%の生徒はスラッシュリーディングが役に立ったと感じており、80.0%の生徒が「英語を読むスピードが速

くなっただと思うか」について肯定的な回答をした。一方で、英語を読む力に関する自信については肯定派が 48.0%にとどまり、苦手意識は依然としてあるようだ。しかし、82.0%が教科書以外の英文への挑戦意欲を示しており、未知の英文に主体的に向かおうとする意欲が育っていると考えた。

## 教師の変化

未知語を推測しながら自分の力で読み進める生徒たちの姿から、「教えすぎない指導」と「自律を促す支援」のちょうど良いバランスを教えられた。それに伴い、これまでの表面的な内容理解を中心とした指導から、母語でやるような、論理展開や筆者の意図を深く味わう読解へと生徒たちを導いていきたいと、意識が大きく変わっていった。こうした自律的で深い読みを後押しする具体的な一歩として、初見の英文に触れる機会を定期的に設けることを大切にするようになった。

## 今後の課題（次の改善点など）

今後は、身に付けた読解スキルを「深い読み」へとつなげる指導が重要だと考えている。しかし、その段階へ生徒を引き上げるためには、初見の英文に対する苦手意識の払拭が不可欠である。今回の研究で、リーディングストラテジーの指導は生徒が自力で英文と向き合うための足場かけとして有効だと思われたため、今後は多様な初見の英文に触れる機会をさらに増やして指導を続けていきたい。「自力で読めた」という実感を確かな自信へとつなげ、自律的に読み進める力を育むことが、結果として「深い読み」の実現につながっていくと考えている。

## まとめ・感想

今回のアクション・リサーチを通して、自分の授業を客観的に見極め、生徒の実情を丁寧に観察することができるようになった。「読む」ということは、単に文章から正しい情報を見つけ出すことだけではなく、生徒が自力で文章の論理や書き手の意図を読み取ることが重要であると分かり、私自身の指導観が大きく変化した。また、勤務校が抱える課題の解決や授業改善について、個人だけでなく組織として取り組んでいく重要性を再確認した。的確な指導と助言をくださった教育センターの先生方、そして日々温かく支えてくださった勤務校の先生方に、心より感謝申し上げたい。生徒たちが自信を持って未知の英文に立ち向かっていけるよう、私自身も学びを続けていきたい。

## 授業改善にあたって参考にした資料等

伊東治己. (2016). 『インタラクティブな英語リーディングの指導』 研究社.

卯城祐司. (2009). 『英語リーディングの科学―「読めたつもり」の謎を解く』 研究社.

卯城祐司. (2011). 『英語で英語を読む授業』 研究社.

佐野正之(編). (2000). 『アクション・リサーチのすすめ』 大修館書店.

佐野正之(編). (2005). 『はじめてのアクション・リサーチ』 大修館書店.

Character Calculator. <https://charactercalculator.com/flesch-reading-ease/> 2026年3月17日

Nation, P. (2013). *What should every EFL teacher know?* Compass Publishing.

## 自信を持って考えや気持ちをやり取りする力を養う指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス 120名（男子 58名、女子 62名）の生徒である。落ち着いて学習に取り組むが、積極的に自己表現することを苦手とする生徒が多い。ほとんどの生徒が4年制大学への進学を希望している。

### 解決すべき課題

「話すこと [やり取り]」の目標として、日常的・社会的な話題について、多くの支援を活用すれば、目的・場面・状況に応じた適切なやり取りを即興で行うことができるようになってほしいと考えている。この目標の達成に向けて解決すべき課題として、情報を追加したり、質問を返したりするというようなスキルの不足と、そこに由来する不安や緊張による負の相互作用によって会話が途中で止まってしまい、そこから何も話せなくなってしまう等、即興でやり取りを続けることができていないことが挙げられる。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・第1回アンケート調査（4月実施：回答者数 116）

1. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？（複数回答可）

英語を聞く力	英語を読む力	英語を話す力	英語を書く力	単語や熟語の知識	文法の知識
68人(58.6%)	68人(58.6%)	84人(72.4%)	59人(50.9%)	63人(54.3%)	68人(58.6%)

2. 英語を話す力に自信がありますか？

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
3人(2.6%)	16人(13.8%)	50人(43.1%)	46人(39.7%)

3. 英語を話すことについて、どのようなことを話せるようになりたいですか？（複数回答可）

自分・家族・学校 などの紹介	身近な事柄についての 簡単な説明	聞いたり読んだりしたこと に対する簡単な意見・感想	身近な話題に関する 意見	社会的な話題に関する 意見
30人(25.9%)	59人(50.9%)	69人(59.5%)	67人(57.8%)	30人(25.9%)

<分析と考察>

最も伸ばしたい力として「英語を話す力」を挙げた生徒が72.4%で、最も多かった。また、英語を話す力に自信があるかという質問に対しては、8割を超える生徒が否定的な回答をした。このことから、英語を話すことができるようになりたいが、現段階では自信がない状況であることが分かった。また、どのようなことを話せるようになりたいかという質問では、「聞いたり読んだりしたことに対する簡単な意見・感想」が59.5%、次いで「身近の話題に関する意見」が57.8%と回答数が多かった。

・第1回スピーキングテスト（5月実施：受験者数103）

内容：直近に学習を終えた単元のトピックに関連するテーマを与え、ペアで1分以上会話をする。

テーマ：What do you think of Hachimura's story?

評価ルーブリック：

	表現の正確さ	会話を続ける力	話し方
A	既習の文法や表現を適切に用いて、正確な文の形で質問・応答を行っている。	不自然な沈黙がなく、相手の質問に適切に答え、さらに関連する自分の考えや情報を付け加えて会話を発展させることができている。	声量、明瞭さ、速度、アイコンタクト等が適切であり、加えて強調、繰り返し等を効果的に用いている。
B	おおむね正確な文法や表現を用いて質問・応答を行っている。	不自然な沈黙がある、もしくは質問の回答に考えや情報を付け加えて会話を発展させることはできていないが、最低限の質問と回答は行うことができている。	声量、明瞭さ、速度、アイコンタクト等がおおむね適切である。
C	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。

結果：

	表現の正確さ	会話を続ける力	話し方
A	2人(1.9%)	2人(1.9%)	2人(1.9%)
B	62人(60.2%)	68人(66.0%)	84人(81.6%)
C	39人(37.9%)	33人(32.0%)	17人(16.5%)

<分析と考察>

「表現の正確さ」と「会話を続ける力」においてC評価となった生徒が3割を超えた。「表現の正確さ」の項目においては、主語+動詞の形ではなく単語レベルでの応答や、文構造が成立していない文による応答が目立った。「会話を続ける力」においてC評価となった発話には、会話が続かなくなって完全に沈黙してしまったり、会話が終了してしまったりするような状況が多くあった。

リサーチ・クエスチョン

聞いたり読んだりしたことに対する考えや気持ちを、自信を持って英語でやり取りする力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：ルーブリックで各項目が B 評価以上の生徒が全体の 8 割以上になり、アンケートの「英語で話す力に自信がありますか」に肯定的な回答をする生徒が全体の 5 割以上になる。

### 改善のための手立て

- 身近な話題についてのペアでの会話を継続的に行えば、自信を持って英語でやり取りできるようになるだろう。
  - ・毎回の授業の最初に、その日ごとの話題で会話をさせる。
  - ・モデルの会話文やフレームの提示、フィードバックを行う。
  
- 語彙・文法とコミュニケーション方略について明示的に指導すれば、表現の正確さを向上させ、会話を継続することができるようになるだろう。
  - ・会話活動に先立って、コミュニケーション方略を明示的に指導する。
  - ・会話活動の際に、言語形式に対する指導やフィードバックを行う。
  - ・録音させたリテリングを教師がチェックし、よく表れる語彙や文法のエラーについて明示的訂正やメタ言語的フィードバックによる全体フィードバックを行う。
  
- 多くの支援を活用して聞いたり読んだりしたことに対する考えや気持ちを表現する活動に取り組みせれば、適切に英語でやり取りできるようになるだろう。
  - ・グラフィック・オーガナイザーを活用して教科書の各パートのリテリングの活動に取り組みせる。その際、自分の考えや気持ちを付け加えて表現させる。
  - ・リテリング活動で、グラフィック・オーガナイザーに例として事前に与える情報を、徐々に減らしていくなど、段階的に支援を外していく。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第 2 回アンケート調査（12 月実施：回答者数 110）

1. 英語を話す力に自信がありますか？

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
1 人(0.9%)	18 人(16.4%)	43 人(39.1%)	48 人(43.6%)

2. 4 月の入学当初に比べて、英語を話すことに自信はつきましたか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	自信がない
8 人(7.3%)	48 人(43.6%)	36 人(32.7%)	18 人(16.4%)

#### <分析と考察>

「英語を話す力に自信がありますか？」という質問に肯定的な回答をした生徒の割合は 17.3%で、改善の目安とした 5 割以上を達成しなかった。ただし、「4 月当初と比べて」という文言を追加すると 50.9%の生徒が肯定的な回答をした。このことから、自身の 4 月当初の話す力との相対的な比較にお

いて「自信がついた」という意識がある生徒は少なくないが、ほとんどの生徒は自己の絶対的な基準における英語を話すことに対しての自信の向上までには至っていないということが分かった。

- ・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数103）第1回と同じ内容、ルーブリックを使用  
テーマ：What do you think of dinosaurs?

	表現の正確さ	会話を続ける力	話し方
A	4人(3.9%)	16人(15.5%)	22人(21.4%)
B	78人(75.7%)	69人(67.0%)	78人(75.7%)
C	21人(20.4%)	18人(17.5%)	3人(2.9%)

#### <分析と考察>

主語＋動詞の構造を持つ「正確な文の形で」の会話が大幅に増えた。また、会話が途切れた際に、追加の質問を行ったり、情報を付け加えたりして、間を埋めようとする努力が見られるケースが飛躍的に増えた。「会話を続ける力」と「話し方」の各項目で、改善の目安としたB評価以上の生徒がそれぞれ全体の8割以上となったが、「表現の正確さ」では79.8%となり、8割に届かなかった。しかし、すべての項目で統計的に有意差があることが確認された ( $p<0.05$ )。

#### 教師の変化

本や研究会等で紹介されているスキルの向上に有益とされる活動を取り入れるということはこれまででも多く行っていたが、ただ授業にその活動を取り入れれば、生徒のスキルが向上するわけではないということを改めて理解した。机間指導や成果物の確認等を通して、具体的な生徒の課題を発見し、そこに対してピンポイントにきめ細やかな支援やフィードバックを行うことが、個々の生徒の話す力の向上には不可欠であるということを改めて理解し、意識して実践するようになった。

#### 今後の課題（次の改善点など）

「英語を話す力に自信がありますか？」という問いに肯定的に回答する生徒の割合に、ほとんど変化が見られなかったことは真摯に受け止める必要がある。どうすれば生徒の自信に影響を与えることができるのかという課題について、「支援」と「フィードバック」を手掛かりに探究していきたい。

#### まとめ・感想

授業は教員の業務の根幹であり、その不断の改善を行うことは教員の最重要の責務の一つであることを自覚し、次年度以降、目の前の生徒にとって最適な授業を行うことができるよう、本研修で学んだアクション・リサーチの枠組みを活用しつつ、授業改善に努めていきたい。

#### 授業改善にあたって参考にした資料等

高橋一幸.(2022).『改訂版 成長する英語教師 –プロの教師の「初伝」から「奥伝」まで』大修館書店.

## 即興的にやり取りする力を伸ばすスピーキング指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	----	---	----	----------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス72名（男子39名、女子33名）の生徒である。例年、指定校推薦等で大学進学する生徒が約6割で、次いで専門学校に進学する生徒が約2割である。英語に対して苦手意識を持つ生徒は多いが、教師からの問いかけに対する反応は良く、音読活動にもよく取り組むなど、全体として授業に積極的に参加する姿勢が見られる。

### 解決すべき課題

教科書の本文を理解したり、教師の後に続いてリズムよく音読したりすることはできるものの、読んだことについて、自分の考えや気持ちを問われても答えられる生徒が少ない。二人組で行うスモールトークについてもなかなか会話を続けられない生徒が多い印象を持った。このことから、自分の言いたいことを英語で表現する能力、会話を続ける能力に課題があるように思われた。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・ 第1回英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数68）

1. 英語を話す力に自信はありますか。

自信がある	どちらかといえば 自信がある	どちらかといえば 自信がない	自信がない
2人(2.9%)	4人(5.9%)	41人(60.3%)	21人(30.9%)

2. 英語を話す力を伸ばしたいと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
52人(76.5%)	15人(22.1%)	1人(1.5%)	0人(0.0%)

3. 英語を話す力はあなたにとって必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
52人(76.5%)	14人(20.6%)	1人(1.5%)	1人(1.5%)

#### <分析と考察>

「英語を話す力」に「(どちらかといえば) 自信がない」が91.2%と高い割合であった。「話す力を伸ばしたいか」、「話す力はあなたにとって必要か」という問いに対し、「(どちらかといえば) そ

う思う」と回答した生徒がそれぞれ 98.5%、97.1%と高い割合であった。自由記述で「生徒がスピーキングに対して難しさを感じている点を聞いたところ、「自分の言いたいことを英語にするのに時間がかかってしまう」、「その場に合った会話をすることが難しい」、「どの単語や文を使ったら相手に伝わるか、文章を考えるのが難しい」といった内容の回答が多く見られた。

・第1回スピーキングテスト（6月実施：受験者数 65）

内容：上山（2022）を参考に、教員が指定した三人組に分け、準備時間なしで与えられたディスカッショントピックについて、3分間で議論をさせる。

質問例：Which do you like better, summer vacation or winter vacation?

評価ルーブリック：

	正確さ	内容	相手の発話への働きかけ
A	・語彙や表現が適切に使用されている。 ・イントネーションや発音など、理解しやすく発音している。	・根拠や具体例などを用いて、論理的に一貫した自分の意見を述べている。	・相手の発話に対して相槌や感想を伝えたり、会話を発展させる質問をしたりしている。
B	・多少の誤りはあれど理解に支障のない語彙や表現を使っている。 ・理解に支障のない発音をしている。	・自分の意見に加えて、根拠や具体例などを述べている。	・相手の発話に対して相槌や感想を伝えている。
C	・Bを満たしていない。	・Bを満たしていない。	・Bを満たしていない。

結果：

評価	正確さ	内容	相手の発話への働きかけ
A	2人(3.1%)	0人(0.0%)	10人(15.4%)
B	26人(40.0%)	41人(63.1%)	29人(44.6%)
C	37人(56.9%)	24人(36.9%)	26人(40.0%)

※全項目B評価以上の生徒は14人(21.5%)

<分析と考察>

「正確さ」、「内容」で A評価の生徒の割合は 3.1%、0.0%であった。与えられたトピックについて準備時間なしで正確な文や発音で発話したり、一貫した内容で意見を述べたりすることが難しい生徒が多いことが分かった。また、「相手の発話への働きかけ」で C評価は 40.0%で、自分の意見を述べるのに終始し、相手の意見を引き出す段階まで行けない生徒が多いことが見て取れた。

リサーチ・クエスチョン

与えられたディスカッショントピックに対して、即興的に自信を持って、話を広げながら自分の意見を相手にとって分かりやすく伝える力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：・ 第2回スピーキングテストで、全項目 B 評価以上の生徒が全体の8割以上になる。
- ・ 第2回アンケートで、「英語を話す力に自信はありますか。」の問いに「(どちらかといえば) そう思う」と回答する生徒が全体の7割以上になる。

改善のための手立て

- 話してやり取りをする活動を行い自分の意見に対して理由や根拠を加える練習を継続的にすれば、充実した内容を論理的に話すことができるようになるだろう。
  - ・異なるトピックでのディスカッション活動を定期的に取り入れる。
  - ・ディスカッション前にイメージマップでブレインストーミングの時間を設けたり、日本語で話し合う時間を設けたりすることで、話す内容を充実させる。
  - ・振り返りの時間を設けて自分の伸びをメタ認知させたり、ポジティブなフィードバックをしたりすることによって自信を持たせる。
  - ・日替わりのトピックで、帯活動として、ペアで1分間、英語で自由に会話をする時間を設ける。
  
- やり取りする際の方略や言語面について明示的な指導をすれば、正確性が向上し、話すやり取りをすることに対する自信を身に付けられるだろう。
  - ・相手の発話を引き出す表現（質問、相槌など）をワークシートに示し、それぞれを使用するごとにポイントを与え、より多くのポイントを取るように声掛けし、使える表現が増えるよう促す。
  - ・ディスカッション後に話した内容について、自分の意見を改めて英文で書いてまとめることで、正確な表現を確認する。
  - ・事後のライティングについて適切なフィードバックを行い、正確性を高めるための気づきを促す。
  - ・明示的な発音指導を行い、発話することに対する自信を高める。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ 第2回英語学習に関するアンケート（12月実施：回答者数 62）  
英語を話す力に自信はありますか。

自信がある	どちらかといえば 自信がある	どちらかといえば 自信がない	自信がない
1人(1.6%)	8人(12.9%)	32人(51.6%)	21人(33.9%)

- ・ 第2回スピーキングテスト（10月実施：受験者数 69）※テストの内容は第1回と同様

評価	正確さ	内容	相手の発話への働きかけ
A	18人(26.1%)	29人(42.0%)	52人(75.4%)
B	51人(73.9%)	39人(56.5%)	16人(23.2%)
C	0人(0.0%)	1人(1.4%)	1人(1.4%)

※全項目 B 評価以上の生徒は 68 人(98.6%)

### <分析と考察>

英語を話す力に「(どちらかといえば) 自信がある」と回答した割合は 14.5%で、改善の目安とした 7割は達成できなかった。「正確さ」A評価の生徒の割合が顕著には伸びなかったことが、自信が向上しなかった要因の一つと考える。パフォーマンステストにおいては、全項目でB評価以上の生徒は 98.6%となり、改善の目安を達成することができた。また「正確さ」、「内容」、「相手の発話への働きかけ」の A 評価の割合がそれぞれ 26.1%、42.0%、75.4%となり、第1回の 3.1%、0.0%、15.4%よりそれぞれ 23.0 ポイント、42.0 ポイント、60.0 ポイント上昇した。ほぼ全員の生徒が第1回スピーキングテストと比較して、英語らしい発音を意識しつつ、自分の意見に加えて、根拠や具体例などを述べて主張を分かりやすく話し、相手の発話に対して相槌や感想を伝えて会話を繋げられるスキルを身に付けたことが分かった。対応のある事前、事後のデータについて、Wilcoxon の符号付順位検定を行ったところ、全項目について、統計的に有意な向上が認められた (すべて  $p<0.05$ )。

### 教師の変化

教育理論や自らの指導に改めて向き合うことで、自分の授業を俯瞰的に見る機会を得た。今回一定の成果を出せたことで、自分の授業にも自信が付き、より堂々と授業に臨めるようになった。

### 今後の課題 (次の改善点など)

第2回スピーキングテストの「正確さ」について伸びが緩やかであったのは、英語の発音についての明示的な指導が薄かったことが一因として考えられる。発音記号やイントネーションについて明示的に指導し、トレーニングの機会も確保していきたい。また、生徒の発話内容の論理性を高める指導では具体的な方法は確立できなかった。依然としてまだまだハードルが高いと感じている。今回スキルに一定の向上が見られたのは、日本語で話し合ったり、イメージマップでのブレインストーミング、事後ライティングのフィードバックなどが複合的に作用してくれたことが大きいと感じた。今後も研究を重ね、英語学習を通して論理的思考力を鍛える機会を提供していきたい。

### まとめ・感想

今回の研修を経て、生徒だけでなく、教員も自信を持って英語を話したり、活動に意味を持たせてそれを生徒と共有したりすることの大切さを再認識した。授業は決して教員だけで完結するものではなく、生徒も協力的な姿勢を見せてくれて初めて成り立つものであり、常日頃からともに授業を作っていくという認識を高めていくことが必要だと強く感じた。

### 授業改善にあたって参考にした資料等

上山晋平. (2022). 『英語トリオ・ディスカッション指導ガイドブック』 明治図書出版.

## 論理的な文章を書く力を伸ばす指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス 107名（男子 63名、女子 44名）の生徒である。ほぼ全ての生徒が4年制の大学進学を希望している。どのクラスも学習に対してモチベーションがあり、ペアワークやグループワーク等、積極的に授業に取り組んでいる

### 解決すべき課題

1問1答のような文法問題に対しては正しく解答できる生徒が多いが、その文法を用いて自分の考えなどをアウトプットする活動では、正しく英文を発信することができない。特に、まとまりのある文章を書く際の全体の一貫性や論理性に課題がある。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回書くことについてのアンケート調査（6月実施：回答者数 105）

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
3人(2.9%)	44人(41.9%)	50人(47.6%)	8人(7.6%)

- ・英作文プレテスト（6月実施：受験者数 99）

内容：生徒の6月現在のライティングスキルを知るために、英検2級のライティング問題を出題し、ルーブリックを用いて、「内容」「構成」「正確さ」を評価した。制限時間 20分。

トピック：In Japan, some people say that famous tourist sites, such as castles and temples, should limit the number of visitors. Do you agree with this opinion?

評価ルーブリック：

	内容	構成	正確さ
A	内容に一貫性があり、主題を支える理由が2つ含まれている。さらに例・理由などによって内容が深められている。	主題文－支持文－結論文の構成が確立し、ディスコースマーカ―などで意見が自然に展開されている。	内容伝達に支障をきたす誤りがない。

B	内容に一貫性があり、主題を支える理由が2つ含まれている。	主題文－支持文－結論文の構成が確立している。	内容伝達に支障をきたす誤りが1～2つある。
C	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。

結果：

内容			構成			正確さ		
A	B	C	A	B	C	A	B	C
10人 (10.1%)	49人 (49.5%)	40人 (40.4%)	22人 (22.2%)	47人 (47.5%)	30人 (30.3%)	14人 (14.1%)	68人 (68.7%)	17人 (17.2%)

### <分析と考察>

「書くこと」について、「どちらかと言えば自信がない」、「自信がない」と回答している生徒は、55.2%であり、課題があると考えられる。プレテストの評価について、評価Cの割合が「内容」40.4%、「構成」30.3%と高く、「内容」と「構成」が主要な課題であることが明らかになった。「内容」では意見と理由のつながりの無さ、「構成」では主題文－支持文－結論文の構成が確立していないことが主な課題であった。論理的な文章を書けていないため、書く活動の量的な確保をした上で、論理的思考力を指導する必要がある。「正確さ」B以上の評価割合は、82.8%であった。生徒は本当に言いたいことよりも表現しやすい意見を述べる傾向があることと、難解な語句を避け、基本語彙で表現しているからだと考察する。

### リサーチ・クエスチョン

日常的な話題・社会的な話題について論理的文章を書く力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英作文ポストテストで「内容」「構成」の各項目が評価B以上となる生徒の割合が、それぞれ7割以上になる。

### 改善のための手立て

- プランニング活動として、内容の論理性の確認、理由と具体例の論理階層を区別する活動を取り入れれば、具体例を用いて内容に一貫性のある文章を書けるようになるだろう。
  - ・トピックに対して、理由と具体例を踏まえて自分の意見を考えさせる。
  - ・他者と、理由と具体例の論理的なつながりが成立するかを確認させる。
- OREO (Opinion-Reason-Example/Explanation-Opinion) の構成型を用いて、意見文を書く活動をすれば、主題文－支持文－結論文が確立した文章を書けるようになるだろう。
  - ・OREOの型に沿って書くことを指示する。
  - ・Opinion、Reason、Example/Explanation、Opinionそれぞれの書き出しを5種類提示し、文章を書く前に教師と一緒に音読する。

- A I 添削を用いれば、内容に一貫性のある正確な文章を書けるようになるだろう。
  - ・ Google Gemini を用いて A I 添削を行う。ルーブリックを用いた評価、理由と具体例の論理的なつながり、文法ミスの訂正、よりアカデミックな表現への提案、文法ミスに基づく文法問題の提案をするよう設定する。
  - ・ 書いた文章を A I で添削し、提案された訂正を赤で書き加えて提出させる。
- 言語面のリソースを増やす課題に取り組ませれば、正確な文章を書けるようになるだろう。
  - ・ 小テストを語法やコロケーションを含めて実施し、意図的にフレーズを含む語彙を学習させる。
  - ・ 基本文法の解説で使う英文を用いて、日本語から英語に訳す暗唱文テストを口頭で実施する。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ 英作文ポストテスト（11月実施：受験者数 101）

トピック：Some people choose to work for companies that create environmentally friendly products and services. Do you think the number of such people will increase in the future?

結果：

内容			構成			正確さ		
A	B	C	A	B	C	A	B	C
15人 (14.9%)	57人 (56.4%)	29人 (28.7%)	45人 (44.6%)	41人 (40.6%)	15人 (14.9%)	15人 (14.9%)	62人 (61.4%)	24人 (23.8%)

- ・ 第2回書くことについてのアンケート調査（11月実施：回答者数 101）

特に伸びた力（複数回答可）

構成力	語数	スピード	内容	表現力	正確さ	特になし
69人 (65.1%)	45人 (42.5%)	36人 (33.9%)	27人 (25.5%)	24人 (22.6%)	12人 (11.3%)	10人 (9.4%)

役立った取組（複数回答可）

OREO の使用	アイデア出し	論理の階層化	ルーブリックの確認	A I 添削	フレーズを含む語彙学習	暗唱文テスト
81人 (76.4%)	47人 (44.3%)	34人 (32.1%)	26人 (24.5%)	36人 (34.0%)	38人 (35.8%)	10人 (9.4%)

※ルーブリックの確認：テスト内容と評価基準の説明

### <分析と考察>

英作文プレテストと英作文ポストテストのルーブリック評価の結果を比較すると、「内容」について評価 B 以上の生徒の割合が 59.6% から 71.3% に増加し、「構成」について評価 B 以上の生徒の割合が 69.7% から 85.1% に増加しており、特に構成面での改善が顕著で、改善の目安とした「内容」、「構成」の各項目の評価 B 以上の割合がそれぞれ 7 割以上を達成した。さらに、第 2 回アンケートの「特に伸びた力」でも、65.1% が「構成力」を選択しており、テスト結果で見られた構成面の伸長は、生徒の実感とも一致していた。これらの結果を検定にかけたところ統計学的な有意差も認められた ( $p<0.05$ )。事後アンケートでの「特に伸びた力」の質問では、まとまった文章を書くことが苦で無くなったことを示す「語数」42.5%、「スピード」34.0%、「表現力」22.6%の回答結果を得ることができ、一定数の生徒は自身の書く力の伸長を実感していた。また、「A I 添削」は一度のみの実施であったが、「役立つ取組」として選択した生徒は 34.0%であり、限定的な実施回数にもかかわらず一定数の生徒が有用性を感じていたことが示された。

### 教師の変化

本研修を通して、エビデンスに基づく授業設計の意識が高まり、PDCA に基づく授業改善を行うことができた。また、授業改善が教員としての教える楽しさを喚起させることを改め感じた。

### 今後の課題（次の改善点など）

「内容」の観点で書く力のさらなる底上げとして、アイデア支援と理由・具体例の整理の仕方を授業で行っていく。また「正確さ」をさらに高めるため、A I 添削を継続活用し、効果を検証する。

### まとめ・感想

高いモチベーションを持つ他校の教員と同じ研修を受講することで、自分のこれまでの指導に固執することなく、柔軟に様々な取組を実施することができた。また、その取組を通じて、教員としてのやりがいも再認識する機会となった。

### 授業改善にあたって参考にした資料等

上山晋平. (2020). 『ニガテな生徒もどんどん書き出す！中学・高校英語ライティング指導』学陽書房.  
中田達也・鈴木祐一(編). (2022). 『英語学習の科学』研究社.

令和7年度 英語教育中核教員育成研修

担当者 (50音順)

池田 知子 (いけだ ともこ)

ウォーリー ジェイコブ (WHALLEY, Jacob)

大石 智子 (おおいし ともこ)

大槻 遼平 (おおつき りょうへい)

鎌田 淳司 (かまだ じゅんじ)

金澤 桜 (かなざわ さくら)

吉川 将太 (きっかわ しょうた)

サンディネッティ スティーブン (SANGUINETTI, Stephen)

鳴海 翔 (なるみ しょう)

パリセ ピーター (PARISE, Peter)

フェアオース ミッシェル (FAIRORTH, Michelle)

プラム ケネディ (PULLUM, Kennedy)

宮田 春奈 (みやた はるな)

村越 みどり (むらこし みどり)

渡邊 大志 (わたなべ たいし)

---

令和7年度 英語教育中核教員育成研修

授業改善プロジェクト 報告書

—アクション・リサーチによる高等学校英語授業での実践研究—

発行日 令和8年3月24日

編集 神奈川県立総合教育センター

(担当) 大石 智子

発行 神奈川県立総合教育センター

藤沢市善行7-1-1

TEL 0466(81)1635

---